

一瞬の魔

夏樹静子



文藝春秋

一瞬の魔

夏樹静子

文藝春秋

著者略歴

1938年、東京に生れる。61年慶応義塾大学英文学科卒業。73年「蒸発」で第26回日本推理作家協会賞を受賞。著書に「喪失」「風の扉」「訃報は午後二時に届く」「ダイヤモンドヘッドの虹」「白愁のとき」「女優X—伊沢蘭奢の生涯」など多数。

いつしゅんま
一瞬の魔

一九九四年九月一日 第一刷

著者 夏樹静子

発行者 阿部達児

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三—二三 郵便番号一〇二
電話東京(〇三)三二六五—二二一

印刷 凸版印刷

製本 大口製本

定価はカバーに表示してあります

万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします

小社営業部宛にお送り下さい

© Shizuko Natsuki 1994

Printed in Japan

ISBN4-16-315000-5

目次／一瞬の魔

一瞬の魔

黒髪の焦点

鰻の怪

輸血のゆくえ

深夜の偶然

5

57

113

169

215

装画 島田章三
(笠間日動美術館所蔵)
装幀 上野和子

一瞬の魔

一瞬の魔

I

女子行員の終業は五時十五分が定時なので、帰り仕度をした吉山富佐子が廊下へ出てきたのは五時半を少しすぎる頃だった。通用口へ行く途中の角で、鍵谷悟と鉢合わせした。すれちがいざま、「今夜寄るから」と彼が富佐子の耳許で囁いた。

「ちょっと遅くなるかもしれないけど」

「え？」

何かあったの、と思わず尋ねかけたが、後ろから別の行員が「鍵さん、鍵さん」と呼ぶのを聞いて、ことばをのみ、素知らぬ顔で通りすぎた。

その時から、富佐子がかすかな胸騒ぎを覚えていた。

一月二十五日木曜のことで、彼が富佐子のマンションを訪れるには多少不自然な曜日だったせいでもある。以前はやはりたいい土曜の夕方、銀行がすっかり週休二日制になった昨年二月以後は、金曜の晩にもよく来る。

ゆっくりしたいなら明日まで待てばいいのに――

それを、遅くなくても今夜寄るといふのには、何か理由があるのかもしれない。

鍵谷が支店長室から出て来た様子だったのも、氣にかかった。

それでも富佐子は、一方ではわかに心弾む思いで、銀行を出ると、近くのデパートの地下食料品売り場へ立ち寄った。マンシヨンの近所では、酒の肴にいいものがない。

鍵谷や富佐子の勤めている日東銀行福岡支店は、市の中心部のビジネス街、マンシヨンはそこから地下鉄で十五分ほど西へ行った住宅地にある。富佐子は七時前に自宅へ帰ってきた。

古い五階建ての三階の2DKに、富佐子はもう二十三年も住んでいた。今年三十七歳だから、中学生の頃からで、ここから高校へも通い、卒業すると今の銀行に就職して、十九年経った。高校時代に、地元の工務店に勤めていた父が現場の事故で急死し、母と二人暮しになった。母は、父がいた会社の下請け会社の事務員として働き始めたが、富佐子が二十九歳の年に、乳癌で亡くなった。以来富佐子は天涯孤独になってしまった。

富佐子は北向きのキッチンに立って、デパートで買った生雲丹うぶにやもずくを料理しながら、習慣的に時々顔をあげては窓の外へ目を注ぐ。真冬の闇に包まれた戸外には、別のマンシヨンや住宅の灯火が点在していた。

昔はすぐ近くに博多湾が見えて、漁り火もきれいだったのに、年々埋立地が拡張されるにつれ、海は先へ先へと遠のいてしまった。

母が亡くなってしばらくは、せめてあと数年でも生きていてくれたらと、どれほど涙を流した

かれないが、年月がたつほどに、このマンションを残してもらっただけでも幸せと思わなければいけないと考えるようになった。父が、市の住宅供給公社から安く買ったマンションは、母の死後四年でローンを完済していたので、富佐子は一生住居の心配だけはしないですむわけだ。

おそらく自分は、優しかった両親との思い出に浸りながら、死ぬまでここで独り暮らしすることになるのだろう。そんな諦めと安息にも近いものが、しだいに心に居坐^まつてきていたせいかもしれない。

ところが、三十五歳の秋から、富佐子の生活はにわかに変り始めた――。

遅くなるかもしれないといわれていたので、覚悟はしていたが、チャイムが鳴ったのは十一時五分前だった。

ドアを開けるなり、長身の鍵谷が前のめりに入ってきて、小柄な富佐子の両肩へ押さえるように手をおいた。

「ごめん、待たせて」

顔が赤くて、息が酒臭い。

「課長といっしょだったんで、電話もかけにくかったんだ」

富佐子がコートを脱がせ、鍵谷はネクタイを緩めながらテーブルの前に胡坐^{あぐら}をかいた。

「どう、もう少し飲む？ それとも――」

「ご飯、待っててくれたんだろう？」

「ええ……」

「じゃあ、富佐ちゃん食べて。ぼくはお茶をもらうよ」

「お茶だけでいいの？」

「うーん、じゃあビールにしようかな、喉が乾いた」

富佐子は、テーブルにかけておいた布巾を取りのけ、冷蔵庫からビールを出した。

注がれたビールを、鍵谷は三分の二ほど一気に飲んで、富佐子にも「飲む？」と訊く。富佐子も半分ほど注いでもらった。鍵谷は自分のグラスもいっぱいにして、少し荒い呼吸でそれを眺めている。

「何かあったの？」

富佐子はさっき訊けなかった問いを口に出した。

鍵谷はまだしばらく黙っていたが、充血した目を富佐子に向けるなり、首を傾^{かし}げ、妙に子供っぽい表情で眉をしかめた。

「転勤だって」

大きな動悸の波が一回、富佐子の胸を横切った。

やっぱり――。

とうに予感していたような気もした。

「夕方外から帰ったら、支店長に呼ばれてね。今日の行内便で辞令が届いたそうだ」

「どこ？」

「東京」

「ああ……」

富佐子の悲鳴に似た声を聞くと、鍵谷はあわてて宥^{なだ}めるように頭を振った。

「いや、東京といつてもね、蒲田支店だからもうギリギリで川崎に近いんだ。津田沼とは反対方向だから、家に帰ったりはしないよ」

「……………」

「支店の近くにアパートを借りて住むことにする」

「それでもかまわないの？」

「自前でアパートを借りる分には問題ないさ。いや、いずれにせよ、千葉県の津田沼から蒲田までは通勤に遠すぎて、ぼくもそんな無理をする気はない。東京へ帰っても独りでいれば、いつでも逢いに来られるし、君に来てもらうのにも都合がいい」

富佐子の眸^{ひとみ}にゆつくりと涙が滲み出すと、鍵谷はそばへ回って来て抱き寄せた。

「大丈夫だよ。ぼくらの間にはなんにも変ったことはないんだ。それはまあ、今までみたいに毎日顔を見るわけにはいかないけど、しかし、いずればくが転勤になることは、はじめからわかってたんだからね。むしろこのほうが、いつそ早くきちんとした形をとれるきっかけになるかもしれないんだ。うん、必ずきちんとして君を呼び寄せるから、もうしばらく辛抱して……もちろん、それ以前にもしょっちゅう逢いに来るし……」

富佐子は鍵谷の胸に顔を埋めて泣きじゃくりながら、そう、はじめからわかっていたのだと、心の隅で思ってもいた――。

鍵谷悟は富佐子より三つ下の今年三十四歳で、約三年前の六月に東京の本店から福岡支店へ転勤してきた。妻子もあるのに単身赴任したのは、千葉県習志野市の津田沼にすでに家を持ち、同居している妻の両親がどちらも病氣勝ちでその面倒をみななければならないことや、当時六歳になっていた一人娘が都内の名門私立小学校に入学したばかりなど、いくつかの理由が重なったのにとらしかった。

福岡では市内のアパートに独り住まいして、仕事は取引先課の外回りだった。スポーツマンタイプで、明朗闊達な印象の彼は行内で人気があり、取引先の受けも良かった。

彼は東京生まれで東京の大学を出ていたが、子供の頃家庭の事情で八幡に住む叔父の家にしばらく預けられたことがあるそうで、こちらの風習などにも多少は馴染んでいた。その点福岡を出たことのない富佐子とも話の合うところがあった。

だが、そんな彼と富佐子がとりわけ親しくなったのは、転勤してきて四カ月ほどたった秋頃、彼の上衣の袖口のボタンが二つもとれているのを見つけた富佐子が注意してやったことがきっかけだったかもしれない。その日はそのままにして、翌日別の背広を着てきた彼は、その上衣を富佐子に預けた。富佐子は新しいボタンを買って、全部つけ替えた。二つだけ別のおかしかったからだ。

以来彼は、そうした身の回りや、台所回りのことなどを、富佐子に頼んだり尋ねたりするようになった。

そのお礼にと、富佐子を二度ほど食事に誘い、クリスマスにはイタリア製のスカーフをプレゼ

ントしてくれた。

その年もいよいよ押し詰った十二月二十九日の夜、二人とも八時半頃まで居残って仕事したあと、彼はまた富佐子を食事に誘い、マンションまで送ってくれた。お茶を飲んでいかないかという、部屋に上って、それから——二人は自然の成り行きのように結ばれた。

三十日の土曜の飛行機で彼は東京へ帰ったが、一月四日には仕事が始まり、その日の晩彼は再びマンションを訪れて、いっそう情熱的に富佐子を抱いた。

「休みの間、君のことばかり考えてた。早くこっちへ帰りたくてたまらなかつたよ」

鍵谷の妻は、彼が津田沼支店勤務の頃の得意先の石油販売会社社長の一人娘で、そちらの両親に見込まれ、上司にも勧められて早くに結婚したという。家も妻の実家が建ててくれたが、妻は両親への依存が強く、彼の仕事を理解しようとせず、夫婦の間はいつまでもどこもなくよそよそしい、といった話を、その後折にふれて富佐子は聞いた。

鍵谷のことには真実の響きがあり、自分への愛もいいかげんなものではないと信じられて、富佐子は生まれてはじめて味わうほどに幸せだった。それでいて、心の隅では、いつかこれは終ることだと思っていた。福岡採用の自分はいつまでも同じ支店に留まっているが、彼は二年か三年のうちに必ずまたどこかへ転勤になり、それで何もかも終ってしまうのだ。齡上の自分はこのマンションに残され、再び独りになって暮していくのだろう……。

——今夜も、まだ啜り泣いている富佐子を、彼はベッドまで抱いていった。
いつにないほどの昂ぶりの中で、彼は何回も繰り返していった。

「家庭のことは、必ずきちんとして、君を呼び寄せるからね、辛抱して待ってて……」

富佐子は、ある瞬間には心底そのことを信じ、また別の瞬間には、心のどこかでたまらない諦めの寂しさを噛みしめていた。

ようやく富佐子から離れた彼は、腹這いになって煙草をつけた。

二、三服旨そうに吸って、ふと思いついたようにいった。

「ああ、例のお婆ちゃんの架空名義の定期ね、今度はばくの代りに君が通帳を預かっというてやってくれないか」

2

転勤後も、彼はひと月に一回くらい富佐子に逢いに福岡へやってきた。金曜の最終便か、土曜の早い飛行機で来て、日曜の最終便でまた東京へ帰っていく。その間は富佐子のマンションに泊った。

福岡では同じ支店の同僚などにばったり会わないとも限らないので、たまには富佐子が東京へ行くようにした。彼は蒲田にワンルームマンションを借りて住み、その時には富佐子がそちらに泊る。

別れている間も、夜の電話で近況を報告しあった。

六月のボーナスが出たあとでは、神戸に一泊旅行することになって、どちらも新幹線で来て、新神戸のホームで落合った。